考古学を楽しくしよう

佐原　　眞

はじめに　1987年、本センターの5周年記念論集に、私は「考古学をやさしくしよう」を書いた。あとで知ったのは、戸沢充則さんが「市民の言葉で考古学」と題する文を書いていたことである。同じ主旨とはいえ、文学性においては、戸沢さんの方がずっと優っている。「考古学を」ではなく、「考古学」で終わっているところが良い。

さて、今回は、前回の続編として綴るのであるから、反復はなるべく避けたい。前回分とあわせ御覧いただければ幸いである。

吉野ヶ里に400万人　佐賀県吉野ヶ里遺跡を訪ねる人は、1991年4月28日現在で400万人に達した、ときく。日本の人口は1億23,253,500人(1989年現在)。そのうちの400万人といえば、国民の3.2%、31人に1人という数値になる。たいした数字である。実際には、1人で何回も訪ねた人がいるのだろう。しかし、それにしても1年8ヵ月間におけるその数値は、世界記録であろう。

それでは、国民の30人に1人が考古学・歴史に関心をいだいているか？

シルクロード博の入場者　1989年4月末から9月末まで、私の住む奈良市で、シルクロード博覧会が開かれた。そして、奈良国立博物館ではシルクロード大文明展「―仏教美術の道」、奈良県立美術館では、「―草原の道」、奈良県新公会堂では「―海の道」が、それぞれ催された。

始まって1、2ヵ月たってからの朝日新聞奈良版だったか、と思う。このような記事を読んだ。入場者の中で、上記3館の展示を見る人は2%に過ぎない。これでは、すすんで国宝・重要文化財級の出品に協力してもらった多くの国ぐにに申し訳がない。なんとかして、この割合を増加することに努めなければならない、と事務当局は語っている、というような内容だった、と記憶する。

私は、とんでもない、と思った。100人入場して2人も入館してくれたら上々ではないか、と思ったのだ。

ところが、奈良県立橿原考古学研究所の菅谷文則さんに実態をきいてみると、上の2%という数値は根拠薄弱で、最初から入場者の10%ほどが入館していた、というのだから、驚きである。菅谷さんは、博覧会当時、奈良シルクロード博覧会学芸専門官という肩書き

で活躍した。その彼に博覧会の入場者と展覧会の入館者の結果をおそわった。

総入場者数	6,818,833人	
国立博物館入館者数	349,075人	5.1%
県立美術館入館者数	672,355人	9.9%
県新公会堂入館者数	2,715,702人	39.8%

この数字の解釈は、むずかしい。国立博物館の展示は、他の2館よりも早く、9月第1週で終わっているから、そのままでは比べられない。新公会堂は、他のパビリオンと接した位置にあるという有利さがあったし、屋外展示や映画など、他の付加価値もあったから、他の2館に比べて1桁違う結果となっている。そこで、会期いっぱい展示し、他の会場からも離れていた県立美術館の数値を使うとしよう。9.9%≒10%、博覧会入場者の10人に1人は入館した割合となり、菅谷さんの言う数字と一致する。

思うに、この博覧会へは、シルクロード、古代文化への関心の高い人びとがかなりの高率で押し寄せたのではないか。

「京都・古代との出会い」展の入場者数　京都府埋蔵文化財調査研究センターが10周年を記念して京都文化博物館でおこなった「京都・古代との出会い」展は、25日間で8,119人の入場者を迎えた。アンケート調査による京都府民の比率は56%、これで試算すると、4,547人、すなわち、京都府民の260万人のうちで1,000人について1.7人が展覧会に訪れた計算となる。

1985年の年齢別日本人口のうち、14才未満と、80才以上の高齢者を除外し、15才から79才までの人びとが占める割合は74%。この数字を使うと京都府民の15才～79才までの1,924,000人中の4,547人で、423人に1人、1,000人について2.4人の入場者ということになる。

1,000人に1人と100人に1人の間　菅谷文則さんによると、東京・大阪で新聞社などが開く有料の古代文明展や美術展の入場者は、百貨店に入店する客10万人中1,000人、つまり1%ていどが平均的である、という。一時、東京のある百貨店が入場無料にしたときも、この数値は変わらなかった、という。

私は、思う。考古学・歴史に関心をもつ人の数は15才～79才の人びと100人に1よりはすくなく、1,000人に1人よりは多いだろう、と。

京都府民260万人。このうち15～79才の人は、74%として192万4,000人。100人に1人とすると1万9,240人。1,000人に1人とすると、1,924人。京都市民は147万人。このうち15～79才の人を74%とすると108万7,800人。100人に1人なら1万878人、1,000人に1人なら1,088人。読者の住む都道府県市町村についても試みに計算してほしい。

さて、都道府県市町村民であって、考古学・歴史の研究にたずさわっていない人を、いま一般市民とよぼう。学問研究を業としてはいても、他の研究分野の人なら、もちろん一般市民にふくまれる。

記述をすすめるにあたって、いま強引に多く見積もって、一般市民100人いれば、1人は考古学・歴史に関心を寄せていることにしておこう。

考古学をやさしく、楽しく、という主張は、一般市民100人のうち考古学・歴史に関心を寄せる1人だけに通じる言葉で語るのではなく、その1人のみを楽しますのではなく、のこる99人にとっても、分かりやすく、楽しくしよう、という主張である。

一般市民100人のなかで考古学・歴史に関心をもつのは1人、として、のこる99人にとっても分かりやすい説明とは、どんなものか。それには、考古学研究者が日ごろ普通に使っている語をやさしくいいなおすことも必要となる。たとえば、どのくらいまでか、実例をあげてみよう。

石鏃　石鏃という文字を仮名もふらずにそのまま使っている博物館・資料館はすくなくない。しかし、日本国民として生まれて義務教育を終わっても、この文字には縁がない。この字をゾクとよむことはできても、矢の先と分かるひとは多くはない。この単語を一般市民99人にまでおぼえてもらう必要はない。矢尻(やじり)と書けば、類推は出来る。「石の矢尻(やじり)石鏃(せきぞく)」、「石の矢尻(やじり)(石鏃(せきぞく))」、あるいは単に「石の矢尻」または、「矢の先につける石器」と表現するか、だろう。

壺と甕　私は、これを漢字で書いて仮名をふっている。しかし、つぼ・かめの方がよいだろう。また、今、私が書いているように平仮名を多く使う文中では、「つぼとかめ」よりも「ツボとカメ」の方が明快だ。

ツボとカメは、一般市民のかなり多くの人が理解している語である。しかし、その理解と考古学での用法とにはずれがあることを承知しておく必要がある。

一般の使い方では、カメは、水や酒をいれる容器である。須恵器のカメはその通りである。ところが、弥生土器のカメは、煮炊き用、つまり鍋である、という事実は、一般市民の理解をこえている。しかも、弥生土器ならば球形の器体にすぼまったくびと外反する口をつけた器種をツボとよび、須恵器なら同じ形の大きな土器をカメとよんでいる。また、弥生土器のカメと同様、口径を上回る深さをもつ土器を縄文土器ならば深鉢とよんでいる。このあたりの事情は一般市民99人にとっては、とてもついてゆけないだろう。

甲冑　甲冑と書いてカッチュウとよぶ。これは、一般市民には難しい。よろい・かぶと、ヨロイ・カブトとよべば分かる。私は、個人的には、甲をカブトというよみで小学生の時おぼえてしまった。兵庫県西宮市にある鉄兜(てつかぶと)形の山、甲山(かぶとやま)を阪神間の電車のなかからなが

め、この字をおそわったからである。考古学を学んで甲がカブトでなくヨロイだとおそわって驚いたおぼえがある。

一般市民にとって、ヨロイ・カブトは、むしろ鎧・兜である。武士が着用するヨロイ・カブトは、こう書くから、歴史小説などではこの字を見る。甲・冑を一般市民99人におぼえるよう強要することはできない。史跡などの古墳の説明板に書くのはやめよう。

タンコウ・ケイコウは、一般市民99人にとって炭坑・傾向である。短甲も挂甲もヨロイでよい。必要ならば胴だけを覆う短いヨロイ、小さな鉄板を沢山連ねて全身を覆うヨロイと説明を加える。

衝角付冑(しょうかくつきかぶと)・眉庇付冑(まびさしつきかぶと)もカブトと書く。先のとがったカブト、前にツバをつけたカブトという説明なら99人にも分かる。私は、後藤守一さん命名の衝角付冑を説明するときは、フェニキアの昔以来19世紀まで、軍艦のへさきは底の方をとがらせておき、最後には敵の舟にぶつけました。このとがった先を幕末か、明治以来、「衝角」とよんでいたので、先のとがったカブトを衝角付きカブトと名づけたのでしょう、と話す。最近の国語・漢和辞典には衝角の項がないものが多いからである。とにかく耳で聞いて分かる言葉で語りたいものだ。

静岡の考古学協会　1988年10月8・9日、静岡で日本考古学協会秋の大会が開かれた。シンポジウム「日本における稲作農耕の起源と展開」を開くにあたって向坂鋼二・瀬川裕市郎さんをはじめとする静岡の会員が計画を練ったとき、私も工楽善通さんと参加させて頂いた。やさしくしようを実行するため、中国北京大学の厳文明先生の講演では、日本に留学中の中国の方に、遺跡名や文化名を黒板に書いて頂いた。日本人の発表者の場合には、壇上の左右に黒板をひとつずつおき、それぞれに工楽さんと私が控えており、難解とおもわれる遺跡の名をつぎつぎに板書した。

スイトウといわれたら一般市民は水筒を思いだす。スイトウコウサクと演者が発言すると水稲耕作と書く。京都大学東南アジア研究センターの高谷好一さんが演者のときも、イショクと彼がいうと、移植＝田植と書き、ジキハンというと、直播＝じかまき、と書いた。会場をみると、メモをとる多くの人たちが黒板を見ながらメモをとっていることがよくわかった。

それ以来、私は、講演会やシンポジウムでは、この方法を採って好評を得ている。

縄文より縄紋の方が明快　考古学をやさしくしようと主張しながら、なぜ文様・縄文でなく紋様・縄紋と書くか、と麻生優さんにただされたことがある。同じ質問はよく受ける。これについては、さだまさしの「防人(さきもり)の詩」の歌詞をもじって、こう書いたことがある。「私はときおり、紋と文について考えます。文様・縄文を使う人は、紋が教育漢字の一つ

で、文と別字であること知っての上ですか。漢字の簡易化を意図して、紋を文にするなら、指紋・紋章・家紋・紋付は、指文・文章・家文・文付と書くのですか。教えてください。施紋法を施文法、無紋化は無文化でいいのですか」(「縄紋施紋法入門」という表題も統一のため「縄文施紋法入門」とされてしまった。『縄文土器大成』第4巻、講談社、1981)。

さて、私が紋を使い、文を使わないのは、山内清男先生の方針を拳々服膺しているのだ、とみる人もある。もともとはそうだった。しかし、今では違う。紋の方が文よりも分かりやすいからである。紋の字は一般市民が知っている字だ。

「無文土器」とは、文様の無い土器です。この場合の文は文様のことです。和同開珎に先立って作られた「無文銀銭」は文字の無い銀貨です。井桁文様のついているものもあります。無文銀銭の文は、文字のことです、と説明するのと、「無紋土器」は紋様のない土器、「無文銀銭」は、文字の無い銀銭です、井桁紋様がついているものもあります、と説明するのとどちらが明快か。

中国の殷王朝では、亀の甲やシカなどの骨を占いに用い、吉凶の結果をその甲や骨に書き刻むことがあった。この「甲骨文」は、最古の漢字として名高い。縄紋土器には、坪井正五郎先生が「大腿骨紋」と名付けた東北地方晩期の亀ヶ岡式土器の磨消縄紋があり、また、「肋骨文」とよぶ半截竹管紋が関東地方前期の諸磯式土器にある。甲骨文・大腿骨文・肋骨文とならべるよりは、甲骨紋・大腿骨紋・肋骨紋と書く方が明快だろう。

天皇陵古墳の名　行灯山古墳・渋谷向山古墳・誉田山古墳・大仙古墳・叡福寺北古墳の名をすぐ理解できる読者は、古墳の専門家か、あるいは森浩一さんのファンであろう。天皇陵古墳の名を在来のその土地でよばれてきた古墳名でよぼう、という森浩一さんの提唱の精神そのものには賛成である。ただし、白石太一郎さんによると、このうち大仙の名は地元では使われることなく、大仙陵とよばれていた由である。

私は、天皇陵古墳のよびかえは、専門家のあいだでは結構であるけれど、一般市民に、よびかえをおぼえさせることは酷だと思う。したがって、崇神陵古墳・景行陵古墳・応神陵古墳・仁徳陵古墳・聖徳太子墓と表現する方が明快だと思う。森浩一さんの一般向きの解説でも、いちいち、行灯山(崇神陵)古墳などと対応を付けている。付けないとわからないからだ。術語としては、行灯山古墳でよい。しかし、一般市民にむけては、崇神陵古墳の方だけを使う方が親切だと思う。

1,200年前の国立迎賓館　福岡市平和台球場の隣にひらかれた鴻臚館の遺跡展示館は金属パイプを組んだ仮設ながら明るくて、中国からもたらされた陶器も出土したままの状況でみせるなど優れている。

「僕ならば、『1,200年前の国立迎賓館—鴻臚館のあと—』という名前をつけるナァ」と

いったら、高倉洋彰さんは言った。「それは、市民を愚弄する言葉ですヨ。市民は鴻臚館の名は知っています」と。この市民は、おそらく福岡市民をさしたのだろう。しかし、名は知っていても、それが何かまでは知らない福岡市民もいるのではないか。そして函館市民は、仙台市民はどうか。五稜郭を知る函館市民、青葉城を知る仙台市民、彼らは果たして鴻臚館を知っているか。この遺跡展示施設は、ひとり福岡市民にのみひらかれたものではない。全国各地の一般市民のためのものだ。

なお、この遺跡展示館の説明に「馬道」をみいだして驚いた。宮本長二郎さんによると建築史を専攻していてもこの術語を知っているとは限らないという。私なら「建物の中の通路」と書く。必要ならあとに(　)内か小さく馬道とそえる。

福岡市金ノ隈の甕棺展示館は、訪ねる人を圧倒する。甕棺の大きさ、その分布密度。甕棺墓地の発掘の現場の感動がここで体験できる。

館に入ると、いきなり正面に甕棺墓地全体の配置図があって、前期末、中期初頭、中期中葉、後半等々、赤・黄・緑などで色わけしてある。この色は、個々の甕棺墓地の傍の小杭にそえた色と対応しているから、研究者は、この配置図によって、時期ごとの甕棺墓を知ることができる。親切な図解ではある。

しかし、一般市民99人にとって、この色わけは必要だろうか。いや、むしろ邪魔である。一般市民に対する説明で大切なのは、この沢山の甕棺墓が決して5年、10年という短期間に作られたものではなく、およそ200～300年間にわたって作られた結果、このように密集することになった、という解説だろう。時期別を知りたい研究者および一般市民1人に応じるためには、それをしめす図を用意しておけばよい。

平城宮資料館の新展示　1987年、私の研究所の平城宮資料館が新装なって再出発した。町田章部長指導のもと、展示を担当した田辺征夫さんを始めとするわが同僚たちは、幸いにも、やさしくしようの精神で取り組んでくれ、展示は一段と分かりやすく、面白くなった。発掘の手順をしめす模型などとてもよく出来ているし、門や建物の復原模型に、奈良伝統の一刀彫りの人形を沢山そえたのも土地がらをしめしていて良い。

説明もずっとやさしくなった。1例をあげてみる。

税につけられた荷札木簡

税のうち、租(米)は地方の役所に納められ、調(各地の特産物)・庸(米と布)・贄(天皇の食料)などは、直接中央政府に納められた。それらは俵や籠につめ、地方の役人に引率された農民が運んできた。荷物には、税を納める人の住所と名前・税の種類・品名と数量・納めた日付などを書いた木簡を荷札としてつけた。

平城宮でみつかる大量の荷札木簡によって、当時の税の仕組みをつぶさにうかがうことができる。

この説明のそばの絵には、馬に乗り、ひげを生やして偉そうな顔付きの役人がいる。税の重い荷をかついで歩く農民がいる。荷からは荷札の木簡がさがっている。説明と絵を見くらべると分かりやすい。

木簡の説明は別のところにあるためか、ここにはない。「木の板に筆で文字を書き記した木簡(もっかん)」とでもすれば、もっといいだろう。また、「調(ちょう)(各地の特産物)」は、私なら「各地の特産物(調)」としたいところだ。しかし、租・庸・調のすべてをこのようにおきなおすことは、むずかしそうだ。

総じて、新展示の説明では、官人→役人、官衙→役所とやさしい表現につとめている。新しくできた平城宮資料館の図録では、大膳職(だいぜんしき)を給食センターとまでいっている。

新しい展示が始まって、感激したことがある。小学生が床に腰をおろし足をなげだしてノートに説明を写しているではないか。私の目には涙が浮かんだ。中学生なら分かる説明をと目指していた。仕上がったものは、小学生にもわかってもらえた！

平城宮の資料館で案内の仕事にたずさわっている石川知恵子さんによると、新展示は好評で、説明もよく分かる。英文説明もよい、といわれており、私の目撃した小学生の坐りこんでの筆写は、珍しくないことだそうである。

平城宮跡の屋外案内板　平城宮跡の何ヵ所かに案内板を作ることになった。ニューセラミックスの陶板で復原図を描き、それに説明をそえる、という。私は、田辺征夫さんに、やさしい一般向きの説明を、大きな文字で書き、少しつっこんだ説明を小さな文字で書くこと、英文は、やさしい方の文を訳すことを提案した。

仕上がった案内板は、平城宮でよく使われた凝灰岩の枠におさまって斜めにすえられた立派なもの(長さ2.8m)で、全体の3分の2以上を陶板の彩色復原図が占めている。右3分の1弱のところの上には、説明と地図とがあって、この場所が平城宮跡のどの部分にあたるかをしめす。

地図は北が下、南が上。この案内板は北面、すなわち北から南に向かって見るのだから、これは当然である。西面なら左が北、東面なら右が北だ。その下に、以下の説明がある。

第一次大極殿(だいごくでん)前の広場と朝堂院

いまから1,300年近くまえ、ここに立つと、目の前(南)には広場がある。広場の方から見上げると、ここの高さは2mをこし、切り立った壁には石垣のように

第1図　平城宮跡案内板

> 煉瓦(塼)を積んでいる。東西両端のスロープから出入りする。広場のむこうには、門をへだてて大きな建物が4つ並ぶ。そこは朝堂院で、いつもは政治が行われ、時には儀式や宴会の場ともなる。はるか平城宮の正門、朱雀門も見える。うしろ(北)の大極殿には、儀式の時に天皇のすわる席がある。

中(上の文の翻訳英文)　省略

下(小さな文字のつっこんだ説明)

> 第一次大極殿と朝堂院との間にある広場は、正月元旦の儀式などの時、貴族や役人たちが整列したところで、「朝廷」とよばれるものにあたる。
>
> 第一次朝堂院は、南北288m、東西216m。まわりを築地塀でかこむ。内にある瓦葺礎石だちの基壇建物4棟は長大なもので、2棟ずつが東西に向かい合って建っていた。4堂形式のこの配置は、12堂を配置した第二次朝堂院(東方250m)とは異なり、平安宮の豊楽院(宴会の場)によく似ている。そのため大極殿・朝堂院ともにここから東方に移ったとする考えのほかに、最近では機能の違う二つの朝堂院が同時に存在したとする考えもある。

まだまだやさしく出来るだろう。しかし、かなり頑張っている、といえよう。

銅鐸博物館の展示と説明　1988年、滋賀県野洲郡野洲町に町立歴史民俗資料館が開館し

た。別称を銅鐸博物館と称する。私は、ここで、展示原案を作り、また銅鐸の部分の展示の説明を先の平城宮跡の屋外案内板と同様、大きな文字のやさしい文と小さな文字のつっこんだ文の2段階で書く方針をとった。展示室に入って最初の説明のみをあげておく。

上(大きな文字のやさしい説明)

> **銅鐸の誕生**
>
> およそ3,500年もの昔から、中国では、青銅、つまり、銅に錫を加えた合金で、さまざまな道具を造り、各種のカネをつくった。このうち「揺れ鳴るカネ」は、旗につるすと神を呼ぶと信じられ、家畜につけると家畜を守り、子をふやすものと期待された。2,300年前、日本に稲作が伝わった時、ウシ、ウマ、ヒツジは来なかった。そして、カネだけが渡って来て、祭りのカネとしての銅鐸が誕生し、独自の発展をとげることになった。

下(小さな文字のつっこんだ説明)

> 中国では、殷・周の昔から青銅器を鋳造し、打ち鳴らす「鐘」、揺り鳴らす「鐸」、揺れ鳴る「鈴」などのカネを造った。王が祭事政治用にと臣下にさずけた「旂」とよぶ旗には、鈴が付いており、神を招き降ろす力があると信じられていた。家畜の鈴にも神の力がおよぶと期待された。日本の銅鐸は、この鈴の系統に属する。朝鮮半島では、中国製の鈴の他に、独自の「朝鮮式小銅鐸」が生み出される。そして、これを手本として、日本の銅鐸が誕生したと考えられている。

上・下の両文ともに私の方針で200字で書いた。しかし、仮名ふりその他で1行分はみだしている。なお、上の文の英訳を付けたのは、平城宮跡の屋外案内板の場合と同様である。

史跡整備とサクラの木　発掘調査がおわった遺跡の一部は、国や都道府県市町村の史跡として「整備」される。

私たちは、分かりきった言葉として整備を使う。しかし、一般市民99人にとって整備とは、飛行機が飛び立つ前にエンジンの調子を調べて整え準備することである。

だから、私は、この語を使うときは説明する。ギリシャやエジプトとは違って、日本では、遺跡を掘ると埋めもどさないと雨や霜で遺跡がこわれてしまう。そこで、遺跡が傷つかないように、穴の中には砂を入れるなど手当てをした上で埋めもどす。そして、その上

に、遺跡が傷つかない方法で復原建物を立てたり、建物の範囲を低い盛土でしめしたり、柱の位置を木を植えてしめすなど色々の方法でしめして、訪ねてきた人が、ここが何かをわからせるようにする。これを整備とよんでいる、と。田中琢さんは、かつて史跡整備を史跡のリハビリ、とよんでいた。いまでは、歴史的環境の創造である、ととなえている。

その琢さんが指摘することがある。最近では博物館を作る準備段階から地元の、博物館を訪ねる人びとの代表が加わって意見をのべることも多くなった。しかし、史跡整備の場合は、史跡整備の専門家、考古学・歴史の専門家、都市計画や公園や環境の専門家が計画してことをすすめ、そこを訪ね活用する人びとがこの計画に加わることはあまりないのはおかしいではないか、という指摘だ。

専門家が集まって、学術的良心をもって、専門知識の枠をこらして作りあげた史跡整備。それは、専門家の、専門家による、専門家のための整備としては百点満点であったとしても、一般市民不在のものにもなりかねない。

琢さんは、史跡公園には桜を植えろ、という。桜の名所にすれば、考古学・歴史に無関心な人も花見にやってくるではないか、と。そうすれば史跡公園は、ひろく一般市民が少なくとも1年に1回は訪れる場になるからだ。

一般市民から最も遠いのは県―村史　いま、やさしく、楽しくする運動が遅々とはいえ進行している中にあって、最もおくれているのは、府県市町村史(以下、略して県―村史と表現)である。県―村史は、一般市民から最も遠い。その多くは、「研究者の、研究者による、研究者のための出版物」である。一般市民のための記述を念頭においているとはおもえないものがひじょうに多い。これについては、長野県史考古編が出版された時に感想を書いたことがある(『信濃毎日新聞』1988年5月16日号)ので、以下にその書評の後半部分を引用しておく。

「ありきたりの批評はこれくらいにして、「市民の言葉で考古学」という立場でこの県史をみてみたい。

一般に、県―村史(県・市・町・村史)というものは、誰が読むために作られたのだろうか。

一般市民(県・市・町・村民)の絶対多数は、考古学や歴史に特に関心を寄せてはいない。ごく僅かな人びとが関心をいだいている。

県―村史は、どちらのためか。

絶対多数を占める無関心な人たちをもふくみこんだ読者を考えるべきだろう。「唯の普通のひと」がページをめくっても何が書いてあるかが分かり、興味をひく内容もみいだせる。これが本来の県―村史だろう。

うちの村で縄紋遺跡が発掘されている。調査が終わったらこわされるそうだ。で、うちのむらにはいつから人が住み始めたのだろうか、と初めて村史を手にとってみる。そこでその村の考古学研究の成果が分かりやすく読みとれれば、その人は、その遺跡を何とかこわさずに、と決意してくれるかもしれない。しかし、村史の記述が難解であれば、ああ学問とは難しい。遺跡など俺(おれ)とは関係ない、こわれたっていい、ハイ、サヨウナラ、と二度と文化財に関心を寄せてくれないかもしれない。

県―村史は、一般市民が自分の土地の歴史を学ぶための最初の入門書となるはずだ。

実態はどうか。

その多くは、隣の県―村史と巻数を、厚さ重さを競うことを目的としたのではないかと錯覚するほど、一般市民不在だった、と思う。

一般市民にとってどうでもいい資料を満載し、専門家が専門家にしか通じない用語をふんだんにちりばめて、学術的香り高い文をひたすら書く、一般市民が読むなどとは一顧だにせずに。

多くの県―村史は、一般市民を拒否してきた。専門家にしか理解できず、考古学・歴史に関心を寄せる人びとにとっても難解であることが多かった。その何よりの証拠として、一般市民が進んで買い求めることはまれだったのではないか。

長野県史考古資料編は、まだまだ難しい。しかし、少しでも分かりやすくという執筆者、編集者たちの懸命の努力のあとが読みとれる。県民のための県史へ、と大きく前進している。その点を大きく評価したい、と思う。

願わくは、絶対多数を占める無関心な人びと専用の「一般編」をはじめ、「高校生編」「中学生編」「小学生編」から成る全1巻(4冊)が計画実施されることを。」

『はすみ物語』　島根県教育委員会の勝部昭さんから教わった1冊の漫画の本がある。島根県邑智郡羽須美村の理想都はすみ振興会が発行し、物語と絵は小室孝太郎さんによる208ページの本である。序文もまえがきもあとがきもない。

かつては6,500人もいた村民は、いま(1984年)現在、3,000人に減った。過疎の村である。少年・少女、口羽君とあすなちゃんの2人も、明日はこの村をあとにして都会の学校へ進学する。観音さまに詣でる2人。ところが美しい女性が出現して、岩宿時代(旧石器時代)以来縄紋・弥生・古墳・飛鳥・奈良……現代まで、この羽須美村の歴史を2人にみせてくれる。物語もしっかりしているし、面白いし郷土愛にあふれている。終わりのところで、羽須美村の歴史を案内してくれたのは、観音さまだったことが分かる。そして口羽君とあすなちゃんは、大きくなったらこの村で暮らせるよう努力しよう。結婚しようと誓いあう。歴史をただ追うだけでなく、2人の愛の話としても進行している。この書物は、おそらく

第２図　『はすみ物語』

日本でいままでに作られてきたどの県―村史よりも、一般市民100人、中学生小学生にいたるまでを楽しませながら自分の土地の歴史を学ばせる書、といえるだろう。

木簡の解説　全国の博物館・資料館で展示されている文書の類。その展示方法は、多くの場合、一般市民99人にとって難解そのものである。文書のみのことも多い。横に印刷体の置きなおしがあれば良い方である。しかし楷書でしめされても何のことかは分からないのだ。99人にとっては、そして勿論、文献史の専門ではない私にとっても。

李白などの漢詩を、奥野信太郎さんだったかが、ふざけて現代ふうに訳したものをみたことがある。あれならば分かる。墨書の文字を記した木の板、木簡（もっかん）の文字もそうしたいという私の願望によって、京都府埋蔵文化財調査研究センターの「京都・古代との出会い展」カタログ作りでは、磯野浩光さんが現代文ふうの解説を試みている。

これが成功しているかどうかはともかくとして、これならば、一般市民100人が分かるだろう。

A　請中板屋東隔　一具在打立者
右依右中弁宣為収納作物所請如件
事了者返上　八年七月十九日上毛野三影麻呂

B　御司召　上加□園依　上加□虫万呂　秦得万呂　加□乙入
右三人等為流人送伴人等宜承知□
C　糟参升左右史生等所請十月十七日三嶋ゝ道

現代語訳の試み

A'「まん中の板倉の東壁の扉の鍵一式を貸して下さい。内閣官房副長官の命令で、作物を入れるためです。用事がすみ次第返します。延暦八年(789)七月十九日、上毛野三影麻呂(かみつけぬのみかげまろ)」
B' 上加□園依(そのより)、　上加□虫麻呂(むしまろ)、秦得万呂(はたのとくまろ)、加□乙人(おとひと)
右の三人(四人書いてある)、罪人を護送するために出頭しなさい、よろしく承知しなさい。」
C'「もろみ、三升を下さい。内閣官房の書記が必要なのです。十月十七日、三嶋嶋道(みしまのしまみち)」

鬼頭清明さんは「研究と展示の狭間で」(『考古学ジャーナル』第331号　1ページ)で、ある木簡の展示で、「御薗」を農園に、「書吏」を係長に書き改めて説明していたことについて、努力は多としながらも、研究者としては一つの逃避ではないのだろうか、と「ひそかに考える」。

「すべてをわかりやすくということをすべてを現代用語で説明するということと同じだとする考え方は、現代社会の価値をすべて含みこんだ絶対的な価値をもつものとしてデッチ上げていることになりはしないか。本当の展示を考える前に、展示をただのレトリックに後退させてしまっているのではないだろうか。これは展示だけの問題ではなくわかりやすい考古学や歴史学を発展させていくためにも重要なものに思える。」という。

磯野さんが「右中弁」を内閣官房副長官、「左右史生」を内閣官房の書記、と表現したことも、まさに鬼頭さんの発言に触れるだろう。

鬼頭さんのいうこともよく分かる。しかし私は、一般市民のためには、「現代語訳の試み」として、農園を係長を使うことの方をとる。「研究者としては一つの逃避かもしれない」。しかし、御薗・書吏では、結果的に一般市民99人をすてさることになるのではないか。一般市民への解説サービスとしての側面からすれば、このおもいやりは大切なのではないか。

木簡の文章は、上の実例をみるように、そのままでは、一般市民にはまったく分からな

い。分からないという点ではシェークスピアの戯曲の原典と変わらない。シェークスピアを現代日本人に分からせるための現代ふうの訳が必要であると同じように、木簡の現代文訳は必要なのだ。なお、磯野さんの作品には、「現代語訳の試み」と題した。あくまでも、厳密に正確なものではないことをくみとってもらったつもりだ。

楽しくする方法　考古学を楽しくする方法、考古学を一般市民に近づける方法については、前回にも書いた。それは、単に考古学研究者の研究成果をやさしく説明することにはとどまらない。

たとえば、瓦の説明として、中房(ちゅうぼう)が大きく蓮子(れんじ)が沢山あり、複弁蓮華紋(ふくべんれんげもん)の弁に起伏があり、周囲に面違え鋸歯紋(めんたがきょしもん)がある、という説明は最初からやらないのである。

それよりは、瓦を飾る蓮華紋こそが、日本で花を造型した最初だった、ということの方が人びとには面白い。それはなぜかの説明の方が面白い。

いろいろの工夫がある、と思う。研究者は研究そのものにうちこむ一方では、その成果を一般市民に分かりやすく解説する務めもある。博物館学芸員は研究者としてのほこりをもつだけでなく、一般市民へのサービス業の位置のあることを忘れないでほしい。そして、思いやりの精神こそが、やさしく楽しい考古学を創造するだろう。

人が入った遺跡写真　京都大学考古学教室の報告書では、人が入った遺跡の写真は皆無ではない。しかし、つとめて人が入らない写真に徹している。奈良国立文化財研究所の報告書では、人が入った遺跡の写真は皆無に近いだろう。

発掘技術の神様といわれたイギリスのS・ウイーラー先生のArchaeology from the Earth(1956年)には、記念撮影はいけない、しかし、物差(スケール)としての人間は大いに使うべし、と書いている。この著書のなかのひとつの写真では、パキスタンのハラッパ遺跡の地中深い日乾煉瓦の壁の下に人が立ち、発掘の排土のために作業員が上り下りするための階段を、土を頭の籠にのせて登る作業員のうしろ姿があって効果を上げている。

博物館・資料館に使っている遺跡の写真の多くには人がいない。人を入れた写真を使おうではないか。ひとつには物差として。竪穴住居の中央に測量用のポール(長さ2m)を横たえた写真。このポールをみても、手前の、向うの長さの物差には使えない。そのくらいなら、人が入っている方がよほどいい。もうひとつには、一般市民を近づけるために。

私の同僚の写真家佃幹雄さんが1969年にとった2枚の写真がある。1枚には人がいない。もう1枚には水を汲む作業員の姿がある。物差としては、人数が多すぎるかも知れない。しかし、一般市民用には人がいない写真よりもずっと良い。

1973年、佃さんは、富山県不動堂遺跡の発掘に参加して写真を担当した。現場の小島俊彰さん、東京から来た小林達雄さんと3人で人の入った写真をとろう、ということになっ

たらしい。ヤグラの上で佃さんがモノクロ写真をとってから、小島さんがヤグラにのぼりカラーで大型の竪穴住居の柱一本一本の横に人を立てた写真をとった。この写真は『考古学ジャーナル』第85号(1973年8月号)の口絵を飾って多くの人をうならせたものだ。その後この手の写真は各地でこころみられるようになった。

私たちは、人を入れる写真に慣れていない。中に入れといわれた人は、自分が主役の気分になる。主役は遺跡。人が主役になってはいけない。石棺の中に横たわるのがよいかどうか、むずかしいところだ。これからは、人の入ったよい写真をとって博物館、資料館、県―村史を飾ろうではないか。そして報告書にも。

第3図　人が入った遺跡写真(上)と入っていない遺跡写真(下)

報告書にもやさしい説明　報告書の最初の部分、見開き2ないし6ページくらいで、術語を使わないやさしい梗概をあげることが出来れば、どんなに素晴らしいだろうか。土の人形(土偶)という説明でもよい。その報告書であつかう遺跡・遺物のあらましを、分かりやすい語で綴り、該当する本文ページや図版、挿図番号もあげる。

たとえば、開発のためにこわれた遺跡の報告書であっても、現状では、報告書を手にした開発側の人は、とりつくしまがない。しかし、一般市民が分かる説明をそこにみいだせば、その遺跡の調査の学術的意義は、いままでよりは分かってくれるのではないか。

一般市民に対してだけでなく、研究者にとっても思いやりをしめす工夫がまだまだ必要だ。たとえば、わが『京都府遺跡調査報告書』はすでに14冊にたっしている。これのなかから必要な本をとり出すことは甚だむずかしい。

たとえば、第11冊(1989年)なら、本の背に篠窯跡群Ⅱとゴチックで入っていれば、それだけで書棚からすっとひきぬけるではないか。その報告書に沢山の遺跡の報告が載録されている場合には、代表的な遺跡名をあげればよい。京都府遺跡調査報告書という表題は背になくてもいいくらいだ。センターの名前だってそうだ。お互いにいそがしいのだから、すこしでも手間がはぶけるように思いやりの精神を発揮したい。

おわりに　1945年、日本考古学・歴史学は神話の呪縛から開放された。しかし、1967年、建国記念の日の名で紀元節は復活した。これには、多くの研究者が反対した。しかし、1945年以来、果たして研究者は一般市民すべてに分かる言葉で書くことをめざしていただろうか。建国記念の日を設置することの非科学性を説く言葉は、果たして一般市民に通じるものだったか。保存運動の呼びかけや、要望者・決議文をやさしい言葉で綴ることにどこまで熱心だったか。その努力なくして、私たちは「文化財は国民のもの」とおこがましくも発言できるだろうか。

一昨年だったか、日本考古学協会総会の席上、ある遺跡にかんする要望書原案が読み上げられた。術語が次から次へ出てくる。私は思わず手をあげて、その難解な2・3の語をやさしくするよう求めたおぼえがある。普通には通用しない術語がいくつも並んでいる要望書を受け取った側では、不快感・劣等感をいだくことはあっても、共感と尊敬の念をいだくことがあるはずはない。

九州に国立博物館を作ろう、という運動が進んでいる。Museum Kyusyuという機関誌は、毎号いただいている。中身はこい。しかし、いささか心配なことがある。関係者の学術的良心と情熱には頭がさがるのだけれど、誰のための博物館をめざしているのか、という点である。九州国立博物館を作ろうという運動に賛成する人の署名簿が印刷されておくられてきた。研究者の名前が連なっている。またしても、国民不在の、研究者の、研究者のための、研究者による博物館が生まれるのではないか、という恐れを私はいだいた。国立博物館に並ぶ品じなは、国民の財産である。一般市民のものである。その一般市民が分かる言葉の説明がなくて、どうして国民の博物館といえようか。新しい国立博物館を作る機会こそ真の国民の博物館を作る絶好の機会ではないか。関係諸氏が、国民の、国民に分かる、国民のための博物館を目ざされんことを期待してやまない。

いま、考古学をやさしく楽しくする運動は、静かに進行しつつある。5年前、「やさしくしよう」を書いたときに比べれば、ずっとよくなりつつある。しかし、まだこれからである。必要なのは学識ではなく、思いやりの心である。

（さはら・まこと＝奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長・
当センター理事）